

夕令中の同令隊員を埋めた。報にあり吉岡一中隊長、靖方副官、見玉中隊長が一中隊の舟と共に脱せ付け、敵機下で必死の奮闘を行ひ八名を救出したが、松岡伍長以下四名は遂に無惨な戦死を遂げた。我が部隊最初の尊い犠牲であった。

情報によれば敵は名簿より本部隊半島に進入一部は伊豆味を衝き、我が勝隊を部へ背後より迫る氣配を示した。四月十日勝隊長より大隊長に宛て「敵機眼下に敵を見し」と電話あり。戦況を氣使つて、其後勝隊を部に対し幾度も情報状況を無電を察したが、我が部からは何の感度も無かつた。斯くて我が勝隊と勝隊の部と連絡は遂に全く途絶してしまつたのである。

ラオオにも大々攻撃に由れば沖繩周辺に群る夥しい敵艦艇の数は千四百隻に上り、我が陸海特攻隊は全方々を以て敵艦艇に書しつゝ、時令勝隊も遂に出動したらしい。四月十四日以上の敵艦艇の損害は計四百隻に達する事。その旨めかふか合ふか伊江島より望見される艦艇総数は幾合減少した所である。然るに伊江島周辺の

5  
10  
15  
20  
25

敵艦は四月十日より漸次増加し、既に周囲の海は完全に掃海された。四月十一日  
傍には敵艦は水納島に碇泊したらしい様子である。一日中二十隻三十隻が遊  
と我々を監視してゐる様である。十<sup>三</sup>日には戦艦及び巡洋艦を含む二十余隻が取  
巻の砲台が正午過ぎごろの戦艦の放った巨砲弾が城山南側中腹にある第一機  
用銃中隊(以下一機)の棲息地に直撃してこれを崩壊せしめた。砲により結方副官  
が本副官を幸ねたことこの救出にあつたが、其の敵艦より丸見えの箇所あり、敵  
艦に射とるのを妨害する困難をためた。城に居る中隊長満留中尉(宮崎縣)又  
の四五名の兵士達は幸に自力で脱出したが中には空軍少尉(宮崎縣)以下十三四名  
が居るもの、その大尉は正午死を遂げたもの、一隊の生存者ある見ゆ、その危険  
を冒し救出作業を続ける事約四時間になつたが、艦砲射撃が益々強くなるにつ  
してはやく一時中止せざるを得なかつた。此の作業中に今迄は城山の西側中腹にある  
第一機用銃中隊(以下一機)の傍にD<sup>2</sup>の移下した五百斤爆弾が直撃して、若石

米軍艦隊に水雷艇四隻は昼間砲撃行爲は行われぬといふ  
四月十四日の夜と推定されし  
伊藤

ひ去来なき復たな波を死しつゝした。巨大な艦が落下し二枚は到底おつたが  
中尾なる隊長以下の数名の傷と四名の死者が復た見はせられしと思はれり。  
其夜田が一機が飛来し、直ぐに下りて五名が犠牲的にも  
重傷を受けた。河野佐長等の死体が發掘された。更に翌十五日朝、最後の二名が救は  
れた。殆んど二十時を生還したる者なりである。

四月十五日朝、伊江島周辺の敵艦は戦艦三隻を含む大小十隻が数へられ  
伊江島全周を砲撃し物凄い砲撃を開始した。敵艦は海岸線飛行場、城山部落と  
強どめの所はない有様である。殊に此の日の弾は口径が大きい為め、今迄の砲撃で  
はビクもしたる各機、島原が一日中恐ろしく揺るが續けた。敵艦の射出す  
る「ロケット」弾は一秒十發の發射速度を以て赤子の太鼓を打つ如くに連射を續けた。  
百發が一時に落ちるとは正に此の慘事であらうかと思はれる。此の艦砲射  
撃は十五日日中續いた。夕方早く煙を出し仰ぐに伊江城山は何時の間にか全く

別山、傍にたつた山頂より麓に到る木とまふ木は一かもし刺さず吹飛んで、若は  
航路落ち、千砂は飛散り、到る處に弾痕が大きな口を開ける。地上の物は總て跡  
方もなく吹き散り、各部隊、各隊員の有線通信は絶へた。山腹より見下す部隊は見渡  
す限りの瘡痍と書き果て居た。此の砲撃は只事がない。敵の上陸は今明日は迫  
るものと推察され、水に滞る各隊の命令が各隊に傳へられた。燈台及び山に合意さ  
れ、各隊は各々分隊は防衛隊に任務を引継いで引揚げて来た。

明永は四月十六日、此日拂曉より翌日に優る猛烈な艦砲射撃が始まった。  
塔が二歩も進むと一程無茶番茶に射る来る。晴天である筈の空は氣味悪  
く黄色に霞んで居た。午前十時頃田村部隊より下士官の傳令が此の弾雨下を  
息を切らせて戦場指揮所へ馳せつけた。其の報告によれば敵は十六日拂曉よ  
り中飛行場南端附近の山海岸に上陸を開始した。拂曉より猛烈な砲撃で田  
村部隊も防衛隊も塔から出る事かたが妙なコンケンの音が聞えるのが見ると

5  
10  
15  
20  
25

既に敵戦車は渚の所に迫り一部は中隊行方不明にも進出して居るのを認められた模様であつた。或る隊員は「敵は既に渚に敵が馬乗りとなり、擧げしを振りかざして居る」と言ふ。田村部隊の隊員も早速と小隊を率ゐて敵戦車を踏み出さず、戦闘を交へたが、急ぎして全隊は戦線を退けたりと。敵の戦車は渚の所に迫り、直に渚に付いた。最早や我々は田村部隊や防衛隊の戦車を踏まんぞ。井川部隊長、緒方副官、佐藤主任は渚に大尉の三人は悠々として作戦を練る。落着き拂つた會話が続く。「生死、勝敗は問題ではない。唯、死んで悔のない面白い戦争をやろう」と部隊長は顔色を押し、葛爾と微笑む。各隊も傳令が降り、各中小隊長以下張りつた各隊の情況が報告された。午後一時退き城山南麓の独立連射砲中隊(以下独立)の隊地より、敵中型戦車数輛が城山西方一軒山に出現して、東進中との報告あり。これに踵を接する如く、城山西方七百米に近接する戦車四輛のうち三輛は我が連射砲の的確な射撃により、撃た

5

10

15

20

25

内は捕まじ他の輸は懐く退かんとす。其の敵殺しなるは機雷に引掛りて飛が  
放たると伏報が入る。其後同方面には随伴歩兵を伴ふ敵戦車十数輛が現れたが  
退き去ると近寄らず南北に移動するのみ。島の周辺は敵機で取巻かれてゐる。上陸軍  
の陣地は右の明である。 戦闘昨日は漸く暮れし行つた。其夜、上陸軍の陣  
地を偵察する為の三三隊橋本少尉(姓)と長とする。翌夜、陣地が山に方面へ登  
せし。同時に各隊四組乃至七組計五組許の最初の陣地隊が戦友に別れを告  
げ、田層七日頃の土着の月ほのかに照らす夜の野へ出て行つた。我々はその夜中  
より丹波にかけて西方一帯に銃砲声の夥し中に向ふべく爆音を伺つた。  
四月十七日、晴天。敵は昨日水網島へ砲六門を揚陸したらしく、朝来艦砲を合せ  
て、盛岡城山地区へ射込んで来た。早朝田村部隊の将校下士官共計十名が我が戦  
闘指揮所へ進んで来た。其後田村部隊長田村大尉は、敵は十六日敵に馬乗り  
され、其夜脱走して敵の包圍下に陥り、生死不明との由。其後田村部隊も防衛隊も事

5

10

15

20

25

(2x25)

(2x25)

る新隊を去して奮戦しつゝの由。昨夜の敵が刺し隊は其後歸る未だ其の報告によれば大部が東飛行場方面に到り、約半数は接敵成功し、敵戦車及び幕舎に爆雷を投入した。各隊が爆雷を投つて、その儘戦車の下に砲火を射し、戦車を去り、散した敵者下士官兵が報告された。多確認される戦果、戦車七輛、榴弾幕舎三輛、敵者豫定の詳細は不明なり。山山方面へ出た格闘、射撃以下は敵中深く潛入して偵察中。遂に敵の軍團に陥り、格闘射撃は重傷を受け、恐らく戦死者多しと思はれると報告が、辛じて腹出しを来たすに、敵は山山海岸中東飛行場附近に多数の幕舎を張り、既に一部に候敵機を戒備を設けし、戦車を並べて居る。その兵員大約三千と云ふこと。

十七日午前十時頃より大型輸送船約七十隻を中心とした敵の大船団が伊江島南岸の海上に群がつて来た。向もなくそれらの船から、幾ら程の上陸用舟艇、水陸両用車等が去り来た。船砲射撃は更に熾烈となり、多砲煙の中に敵が新波止場より旧波

止場に至る南第一帯は新の上陸と同様す。ガキに取らぬ見えず。多量の機銃の  
射撃を聴いて、歴戦志士の緒方副官も流石に言葉を飲んだ。水納島一帯の海面は  
全機銃が埋まっていた。止場正面を歩いている三中队より報告にられば  
敵は兵員及び飛行機場施設機材らしきものを揚げてあり、兵員は約六十名と推  
定された。三中队及び一機は陸地よりこれを攻撃して、敵兵の斃傷のガキに取らぬに  
見え、痛快な戦闘をしたのであるとの報告。

井村隊長及び副官は、陣中から戦闘指揮所へ来た諸江大尉と共に直議三中队、敵  
の態勢未だ整はざらぬ今夜半を期して、全部隊の三分の二の兵力を以て此の新手の敵に対  
して夜襲を敢行す。これを海中へ撃退す事に決した。兵連は半死の死傷を以て攻撃して  
華々しく散る事を見て居たので、此の命令を聞いて皆勇んだ。一機中隊長瀧留  
中尉は泳ぎ上りの部下数名を連れ、今夜水納島へ泳ぎ渡り、其の砲を爆破せん事  
を大隊長へ申し、諸江大尉の支拂を得て、爆雷を自動車のタイヤを持って出た。



敵戦車陣は城山西方へ来て居るが、其口を徘徊するのみで近寄らない。部隊の重火器の大  
部が西方に向いてゐるが、同方向から敵の来ると我の思ふ通りであるが、敵は昨日の痛打に  
懲りて西方には候敵撃武器を放棄して近寄らな。 午後四時頃三中队より戦死  
を傳へられた格を、少尉は自ら傷せざる元氣で兵に助けられて無事脱出歸隊せし  
との知らせがあつた。 夕方頃には敵の作候が部隊の西端方面に出没して来た。  
其夜、淡い人影が三々五々靴音もしのびやかに、黙々と城山の里の影の中から四方へ散つ  
て行つた。其の鉄兜は緑、三角巾で包まれて淡い月光を反射する防かんとし、軍力の極  
を巻いておいた白い繻帯も影を除かれてゐた。今ほ其処の木蔭に、此処の毀れた家跡に  
敵の作候が潜んで居るかも知れない。兵達の交す神風、風の合言葉も低い。時折  
り砲弾が落下する中を各隊の命令を攻撃準備地へ各個へ急いだ。 三中队の一  
機は予備隊隊地に、新止場は何ひ一中隊は旧止場に討して隊取り、本隊は三中队の  
西に編み、独機は三中队隊地に加はれた。 部隊長は副官以下本部の兵を以て、新止場

5  
10  
15  
20  
25

を眼下に見るや、後高地に據る。比嘉、見玉、高倉、匠の率ゐる衛生部は三甲の塔に縮  
撃所を開設した。上弦の月漸く傾いた。八日午前十時頃より各隊一勢力に銃火を用いた。  
を機を主とし、豆を餌に探偵機といふ銃声か暗夜の静寂を破る。我が攻撃を方は新海止  
場に向けられた。我が高橋に敵は暫時度戦をして来たが、間もなく狂った  
標にありあふ火を射つて来た。野砲、迫撃砲、それら海上に在った船に軍艦の艦砲が一勢  
に我方に向つて火を吐き始めた。殊に我が軍機隊には艦砲弾が雨下し、戦場は一瞬にして  
母の二銃は破壊され、其の残存する名が自傷し、捕獲所に送られ、水兵の名は戦死を遂げた。  
戦場は尚激しく継続せられたが、敵の猛弾雨は、我に止む場の平地へ近づく事を許さな  
かつた。然も敵戦車一は暗夜を利して我が陣地を迂迴し来た。砲銃撃を加へた。之れに  
對し我が肉攻を木蔭から飛出し、爆雷を投げる。二輛を破壊した。さうして東天漸く白  
む頃を待たず、部隊長は全員に攻撃中止を命じた。此の夜終るまで我は前線の  
独機の犠牲の外に各隊死者の戦死者を去した。敵軍相當の損害を予へたに相違ない。

が暗夜の事として確認するよしもたがた。

夜が明け放つて翌十八日、晴れ渡る好天気であった。昨夜徹宵の夜籠戦から夜

此の各隊陣地に帰った兵連にゆうゆうとした休養の時間は殆んど乏しくなつた。敵は

午前時頃から我らに對して本格的攻撃を加へて来たかである。多主攻正面は三隊一機の

守備してゐるが夜高地である。城山西方の敵は依然近郊の南へ廻つて部落南西端

より二中队、兒島小隊の守備正面を衝かんとする態勢を取つた。又北へ進んで城山を遠く

北方より迂回する如く北海岸寄りに進出した。昨日は止場の上陸した敵は主力となりて

南方より部落及び夜高地を攻撃し、更に一部は南海岸寄りに東進して東海岸に

進み、其のより城山方面を衝かんとして高野小隊(能登縣)の據りたる山より東方に連な

つた連の基地の陣地の正面に現れた。敵の主力は戦車約百輛を主隊とし、その後方に多数の

砲を携へてきた。物凄く銃砲声と硝煙、自軍を衝く煙硝の臭ひが伊江島東半部を敵

に包んで、敵機は低空して地上の敵に協力した。友軍は暴露すれば敵機から掃射

27

よしも、或は敵機の通報に誘ひ追撃砲彈の雨を浴びねばならぬ。と言つて塔に引込こ  
りながら目を離せば、地上の敵はさう隙に戦車と以て一挙に我が塔地を蹂躪せんとす。勢  
である。対戦車砲は不幸にも南方に向つてゐた。飛行機と戦車と持たぬ軍隊は近代戦  
に於ては実に苦しい。惨めな戦闘を強ひらるゝものだ。  
敵主攻正面に立つた平良中尉(沖繩縣)の率ゐる三中隊は此困難の中にあつて、実に之派  
な奮戦を続け、高地に迫る戦車群を有機と擲弾筒と肉攻で防ぎ、高地を固守した。  
中全少尉(鹿児島縣)吉見少尉(熊本縣)中隊長の留守を引受けて、青年隊隊士しく奮切つて  
勇戦した。敵は潮が如く押し寄せたが、我が猛反撃に進出不能となつて退いた。その  
退いた後、追撃砲と艦砲の彈が雨下して来た。反軍は此の彈雨に包まれて動けな  
くつた。斯様な死闘激闘が十八日中幾度も繰返され、我軍は各隊高地を確  
保してゐた。その激闘に我軍にも犠牲が続出した。その傷病地の手強さに敵は凍死した東漸  
して、女島基地の存地に戦車約二十輛を以て押寄せた。高島少尉は自ら砲頭に立ち、軽機

5  
10  
15  
20  
25

(12x25)  
20

(12x25)

と擲彈筒を以て防いだ。遮蔽物の少く其の日の所御おは困難を極めたか責任感の強い  
飯花を以てした中尉以下三十余名は彈雨の中に敢闘した。城山の戦闘指揮所より此  
を眺める所の村の中隊長以下皆声を飲んで其の奮戦を思ふた。午後三時頃中隊  
より傳令あり。北海岸を東進して来た敵戦車約十輛は十八日午前十時過ぎ「ミヤト  
原」に分散して居た。前田中尉(鹿野島縣)指揮の二ヶ分隊及独機一ヶ分隊の正面に  
来襲した。中尉以下肉攻を以て之れに猛攻を加へ防戦に努めたが、北月後には廻つて来た敵  
より中隊長の間に夾撃を受け、前田中尉及びその部下の大部分が華死し、戦死を遂げ  
たりと。戦後の最初犠牲であり、元氣な物の如き前田中尉の死は、最期を部隊長  
は静かに止まり、聞き入つてゐた。

斯くて激闘は明け、激闘に暮れた十八日は友軍の善戦によりよく敵を抑へて、夕  
霞濃くはる頃、砲声も漸く少くなつた。其夜も偵察機が出入りしたが、東西南南三才  
の敵は偵察機を幾つも撃墜し、足音をしのばせて、餌を食ふかすかな物音にも、不

焼け残った石本にそよぐ微風の音にすう機銃、迫撃砲を集中するのを容易に近來州  
の状況であった。

十九日も晴れ、やはらかな日光が此の暑う果てた荒涼そのもの竹藪場に注いで  
居た。敵は早朝より再び昨日と同じく高尾地及びその麓地帯に對して猛烈な攻撃  
を加へ来た。連日の激闘に不眠不休、乾麵を噛んで奮闘してゐる兵は、眼は落込  
み込んで、烈々たる闘志をたへた顔は物凄い面相を呈して居る。殊にわ三甲隊及び  
一機は敵砲攻の面に立ちこたひ日夜の死闘に死傷者漸く多くその所有彈薬は  
缺乏を告げる情況にある。此の日三甲隊長平良中尉は今日こそその陣地死守の  
日であるとして、指揮隊員と遙かに皇居を拜し、萬歳を奉唱して戦に臨んだ。敵の  
この日の砲撃は地上のあらゆる物を掃き去るが如き猛烈なもので、砲弾の簾を戦車の所  
にまで進んで来た。三甲隊の古野少尉も昨日と同様に死力を盡して戦に續けたが午  
前十時頃には敵は遂に午後高地に進出して来た。此の高地より伊江島最後の陣地は

る伊江城山の榎野陣地近は僅か三百米にて、我が戦隊指揮所を指顧し同じ望み他、  
諸階地と目下に見下す要地である。これを敵手に委ねる事は既に我が懐減を意味する。  
敵遂に此後高地に現れる。報を聞くと独逸隊長諸江大尉は自ら部下を率ひて  
此後高地下の平地に進出した。二中队の一部をこれと掩護してその西方に誘った。敵は伊  
江赤松が、三中队一機の将兵は四周を敵に圍まれながら志士の陣地を死守して奮戦して  
ゐた。我が巨砲は、この後高地の上と下、傍りに三、四十米に居るが、敵も後方からの砲撃  
は、これと併し、我が後軍を遮るとして城山方面に砲弾を集中した。此際、諸江大尉  
を先頭に兵は、この後高地の北斜面に取附き、戦車砲の向隙を見こき、榴弾を高地上の敵  
に投じた。敵は此の我が決死の攻撃に恐れ、遂に高地上より後退した。その退い  
た後、今更には砲弾の雨が降る未だ。手良中尉は此の砲弾の雨の中に遂に名譽の戦死  
を遂げた。報より、副官諸江中尉は、諸江大尉の安否を氣づかつて、軍身高地に馳せ付  
け、大尉と共に指標を取った。この時、高地とせ山の中間の道より進出して来た敵戦車の

射撃を側背に受け、その弾は諸江大尉の左下腿に命中した。鮮血に染みつゝ、大尉は高橋を援けながら、副官と部下の願ひにより遂に後退した。大隊長は永徳少尉(鹿児島縣)指揮の大隊本部員に、高橋高地の救援増強を命じた。後退して来た居た田村部隊、将兵もその戦況に加つた。戦闘は其夜十時に到る迄繼續せし、独逸の力闘により奪回した高地帯は我が手に確保されたのである。

他方東海岸を迂回し、基地陸地の北方を通過して西進した敵戦車約十輛は城山にある一中隊正面に猛撃を浴せて来た。この間一中隊長は森少尉(鹿児島縣)指揮の一ヶ小隊を以て堅固な既設陸地に據つて防戦した。

此の日朝、城山戦闘指揮所附近は敵の砲弾の雨の中に煙つて居た。敵の発煙弾が飛込んで壕中はあつた。白煙が立ち上り、煙硝の臭いから自軍を察した。曳火弾が壕に這入る来た。壕に入るの岩石が崩れ落ちる。兵連は多少初撃した。敵が壕



上に馬乗りすまのを恐れたのである。各自手榴弾を振り、鉄兜の緒を解束めた。「早く  
壕から脱去せぬと壕内で大死するぞ、早く出よ」と叫ぶ者がある。その時井川部隊長  
は新金の壕に向う居たが、若者も早める事もなく静かに食へ終へた後、例の太い声で兵達を  
判した。「皆何を慌てるか、既に生死を超越した者は何事が起らうと騒ぐ事はない  
ではないか、然も俺の方へさう、敵は来た程近く来る筈はない、緒方副官捕獲を  
見よ」  
壕の入口に立つてゐた副官はやがて午後四時、女山の線は高友軍が確保しおる  
事を報告した。兵達は漸く平静に返り始めた。此時壕の中から朗々たる福山中尉の歌  
聲が聞えて来た。「……戦火交ひる幾日生霜、七度輝く感状の、勅の蔭に涙あ  
り、嗚呼今は七ヶ峠の、笑つて散るもの心、……」兵達が何時となく水に和して口ず  
さみ始めた。壕の外には依然として言語絶する彈雨が我々の壕に注いでゐたが、壕の奴に  
は最早何の動搖もなく、此の部隊長と云に悠々の大義に生かさんと誓ひ、兵達の澄み切つた  
歌声のみが響いてゐた。

然しこの騒ぎで最後と頼む世電機が破壊される。全員玉砕の最後の場合、  
軍司令部へ報告する電文も既に副官により用意されてあったのに、今は此の小島  
島に於ける悲壯な奮闘の模様を誰にも傳へる事が出来なくなつたのだ。勿論誰も功を求  
める氣持は寸毫も抱いておなかつた。然し部隊長としては克爾として死んで行く部下  
の心境を思い遣つて、此の戦場の経過を皆最期の有様を上官に遺族に傳へたかつた  
をあらう。砲声韻々たる壕の入口で児玉守屋に向ひ、最後の突撃後、若し出来  
れば本部隊が島へ入り、聯隊長に戦況経過を報告する様に話して居た。  
其夜児玉守屋は衛生兵を引率して、負傷した諸人大尉を始め、独逸二中隊の將兵  
の治療の爲め城山を下つた。左下腿首管銃創で横臥してゐた諸人大尉は、平  
常通りの静かな調子で児玉守屋に話した。「どうせ明日一日五小はよい體ですか  
う、痛みだけ止めて下さい。此の壕の直ぐ西には敵が居るかう。二中隊へ行々途中は夜  
意する様に……」

一夜の戦場は敵が間断なく打ち上げる照明弾により晝

とあふむく如くである。敵砲弾は間断的に落下して、多量に音が「ヒル／＼」と  
と氣味悪く音を立てて落ちて来る。斯くて激戦第四日の夜は更けて行く。

二十日の朝は爽やかな晴れ渡った朝であった。静かに目を開いて耳を澄せば、小鳥  
の囀りが聞へる。それは戦争前の平和な樹蔭に戯れ遊ぶ小鳥の音と少しも異なる  
い。一瞬、身が戦場の外にある様な錯覚に陥られる。然し一度眼を閉じて見え  
る光景は、何処か部落か何処か畑が見ゆる事も出来ぬばかりに荒れ果て、煙硝  
の臭いは土に沈み込んで居た。

昨夜命を失せしめて、今日は西方に対しては一部、兵力を残し、他は全力を以て、午後  
高畑の線に向ふ事にした。壕内の速射砲も、薄池の中村の野砲二門も今日  
は陣地から引去られて、南方、東方の敵に向けられた。今は敵機が頭上を低回して、誰か  
が来ない。此の敵も、總力を拵りて、午後、葛城山方面に強引な攻撃を加へ来た。  
9. 午、前既に高畑高畑に戦車及び砲を並べ、我方に陣子戦車を加へて来た。敵

の砲門から出る火がすぐ目前に見える。

三隊隊長大崎中尉(宮崎縣)は昨夜徹宵で陣地の整理、岳の区処を行って居たが

此の朝迄療しつゝ見る見事な軍士に、「愈々今日が最後ですわ、よく今日と頑張りました。

たぬ」と静かに語りながら壕を出て行った。児島小尉(鹿児島縣)もその末和

兵を重頼を流石に緊張させたが、「理長行かうせ」と言いつ、銃声絶え、午後

方面へ退行した。

今や戦線は敵味方入り乱れ、敵機は低空にも撃たない。唯、戦車砲と重砲は

茶に射つ。既に友軍の弾薬は各隊共に缺乏してゐた。手榴弾も多くは残

る居なかつた。二隊指揮官陣亡を率ゐる午後正面に進出し、奮戦してゐた

大崎中尉は正午頃敵弾を受け、斃れた。最後の遺言で陣地を死守してゐる三

隊移り、射、河田准尉も砲弾を喰ひて悲たな最期を遂げた。永徳少尉堂

園少尉、戦死の訃も傳へられた。墓地陣地の北側を運つて城山へ墓場とする。戦車

正側面より攻撃して来た高野少尉の胸部に敵の機銃弾が命中し、  
少尉は坐った。その時高野少尉は、兎島少尉の敵弾を受けて重傷した。  
牛橋少尉は敵は両方から攻撃して来た。之れを避けて草叢中尉(大分縣)指揮の  
二中队の二小队と独逸機銃の長は必死に防戦した。此の時独逸小隊長山下少尉  
は銃眼より飛来した戦車砲弾を頭部に受けて即死した。同じく向山准尉も路  
上にて敵弾の爲の散った。中釜吉見両少尉の消息も連絡がなかつた。下士官も兵  
も次々に散死して行った。我軍血みどろの苦戦のうちに日は漸く西に傾きかけた。  
敵戦車群の取巻く鉄環は既に此時には、城山を取圍む直径約三百米の円周とな  
してゐた。

夕方五時頃右手に板味の軍刀を振り、左手に長銃を持つ野口少尉(鹿児島縣)が  
十七名の兵隊を連れて二隊の陣地に現れた。三中队は全部でもうこれだけだ。  
重傷の部下にせまふれ、到々此等兵隊で殺して来た。敵を撃つたうと思つて